



高知県前黒潮町立佐賀中学校 教頭 大塚明人
(四万十市立藤岡中学校 校長)

1 はじめに

黒潮町は、南海トラフ地震発災時に34mという日本一の津波高が想定されており、町ぐるみで「犠牲者0」をテーマに取り組んでいる町です。佐賀中学校は全校生徒60数名の小規模校ですが、「人間を大事に」という教育目標のもと、長年にわたって人権教育・福祉活動に取り組んできました。現在、その基盤のうえに防災教育・防災活動を積み重ねています。以下、2017年度の主な取組を紹介いたします。

2 地域とつながる

●屋内避難訓練

本校の防災委員会と生徒会執行部が中心で、屋内避難訓練にかかわっています。これは中学生が高齢者の自宅に訪問して、寝室から玄関まで出てくる時間を計測したり、室内の状況を確認したりしてカル



家具固定の状況や普段の生活様式について、聞き取りとカルテを作成。

テにまとめる取組です。こうして中学生がかかわることで、今まで一度も避難訓練に参加していなかった方が、「行ってみようか」「次は参加する」と言ってくれています。また、お礼の手紙をいただくなど、中学生も元気ももらっています。

●津波避難タワー

「階数・高さ表示板」の制作



常時開放されているので、地域の皆さんにも大変好評です。

『ぐるぐる回って登ったら、ここが何階か分からん。どこまで登ったら安全ながやろ?』

という地域の方からの声が本校に届いたのは、日本最大の津波避難タワーが佐賀地区に完成してから1か月後でした。これを受けて、佐賀中学校美術部が「階数・高さ表示板」を制作しました。6月から下見や聞き取り・下絵描き・関係者との打ち合わせを経て、2月14日に取り付けることができました。文字だけでなく、色でも「危険→安全」が分かるように、上の階に行くにつれて「赤色→黄色→緑色」と看板の色も変わります。また、階

数と同じ数の魚も描いています。すべて佐賀漁港でとれる魚です。

3 メキシコの中학생とつながる

●エヴァ・サマノ中学校との 合同津波避難訓練とその後

7月11日、12日に、京都大学防災研究所のみなさんの協力のもと、メキシコ合衆国シワタネホ市にあるエヴァ・サマノ中学校と合同での津波避難訓練を行いました。これは、遠地津波が約24時間かけて伝播することをリアルに再現しての世界初の取組です。本校全員での避難訓練を実施し、その様子と応援メッセージを動画で送り、24時間後にエヴァ・サマノ中でそれを視聴して訓練を行いました。また、インターネット回線を利用して中学生同士の交流も行いました。

その後、9月のメキシコ地震への応援動画を送ったり、世界津波の日にはシワタネホ市に両校の生徒のメッセージをタイムカプセルで埋めたりしています。また、同じものを佐賀地区避難タワーの最上階の部屋に保管しました。50年後の自分への手紙として書いたメッセージには、『津波は来ましたか？ 訓練通り逃げましたか？ どんな仕事をしていますか？』



エヴァ・サマノ中初の避難訓練の前に、生徒同士の交流の時間。

と南海トラフ地震を乗り越えた自分への夢が詰まっています。

4 おわりに

この他にも、保小中合同避難訓練、地域との合同炊き出し訓練等々、つながりを広げ深める実践を重ねてきました。

学校近くの自主防災組織の会長は、いつも防災への思いと中学生への期待を伝えてくれます。

『ここらは漁師町やから、若い男の人は2月にカツオ船に乗って漁に出ると、11月初めまで帰ってこん。地元に住みよう人は、町に仕事が少なき町外に仕事に行きよう。それやから昼間は子どもと年寄り、女性しかおらん。しかも高齢化率はすごい高いがよ。そうやけど、こんな地区やからこそ、あきらめたらいかん。今、わしらは中学生とつながって一緒に活動することも増えた。これも希望の1つやと思う。』

振り返ってみると、防災の取組をとおして、生徒たちは地域の人の思いに触れ、頼られている自分に気づいてきた1年間でもありました。そのなかで、確実に生徒の自己有用感も高まってきたと感じています。



地域の方たちとの合同炊き出し訓練後に、感想・思いを伝えあいます。